

平成14年5月21日
第150回『21世紀塾』参考資料
(第14回提言)

「大人も楽しめる真のリゾート地・伊豆」を目指して

『21世紀塾』代表世話人 小野 徹

【問題提起】

海外の有名な観光・リゾート地には、来客、特に滞在客を、思う存分に楽しませ、かつ又、金も落して貰おうとする「熱意」がある。

その現れが、滞在客の様々な好みに合わせるかのように、幅広い選択肢が用意されていることだ。それも、「飲む、打つ、買う」といった、大人を楽しませるものまで揃っていることが特徴だ。

例えば、世界一の観光地ナイアガラには、アメリカ、カナダに跨がるあれほどの名瀑(!)がありながら、ホテルでは観光客の為にカジノを開いているし、ドイツでも有数の温泉保養地ウイスパール・バーデンでは、保養地のド真ん中に、カジノと、いわゆる特飲施設がある。

バクチは、ご法度(!)の筈のイスラム教国、マレーシアの、首都のクアラルンプールから30分のゲンティン・ハイランドには、遊園地にカジノ(!)が併設されていて、大人も子供もそれぞれに楽しめる施設になっている。

あまりにも有名なバクチの都ラスベガスなどでは、カジノどころか、大人も子供も一緒になって楽しめる、あちこちのホテル前で展開される大掛かりなオープン・ナイト・ショウを売り物にしている。

翻って、わが伊豆はどうだろうか。――大人がたっぷりと楽しめるようになっているだろうか。

昼間はそれでも、サイクリングであるとか、文化体験、農林漁業体験といった、滞在型リゾートと連泊システムの萌芽が出て来たが、夜間はどうかだろうか。

夜間の見学場所、夜間の楽しみ等、一体、伊豆には夜のリゾート文化といったものがあるのだろうか？

旅館に泊めて、「温泉に浸かって、のんびり、ゆっくりして下さい」と言いつつ、

宿泊客には、夜はいつも家でも見ているテレビを見せて、旅の無聊を囲わせているのではなからうか。

その点、移動時間で、よく皮肉っぽく伊豆と比較対象されるグアム島では、夜、ドッグレースなども開催されているし、サイパン島には、すぐ近くのテニアン島にカジノがある。

米国のアリゾナ州のフェニックスでは、リゾート地でありながら、一流ブティックが軒を連ねている。何故かといえば、毎夜どこかで開かれるパーティーに、ご婦人方が着てゆくドレスを調達するためにあるのだそうだ。

そう考えると、日本一の観光・リゾート地、伊豆には、国際的リゾート地と比較して、明らかに足りないものが、数々あることがわかる。

どうしてそうなっているのかといえば、滞在客に、まずは「飲む、打つ、買う」といった人間の本能をくすぐることをさせたくても、さまざまな法的規則もあるし、世間のヒンシュクをかうことを恐れて、自分で発言・提言を規制してしまったり、発想すること自体を止めてしまうからだろう。

これを変えるには、我々の「意識の転換」が必要なのであって、――実は、その為の生きた素材として、「地球の未来を自ら考え、創り出そう」と、『伊豆新世紀創造祭』が計画されたのではなかったらうか。

だから、今からでも遅くない。

――視野を広げて、世界のリゾート地のノウハウを取り入れよう。

――頭で考えているだけでなく、「良かれ」と思う事は、外に向けて発信しよう、やってみよう、やらせてみよう。

――日本一の観光・リゾート地の座が危ういという危機感と、過疎が進んでいるという危機感を合わせて持って、なりふりかまわず、やれることをやろう。

――景観や、温泉を中心とする豊かな自然に加え、温かいもてなし心をもった「国際的観光地」、すなわち、「大人も楽しめる真のリゾート地・伊豆」を目指して・

・。